

淡路島被災地にみる日常生活への復帰に関する一分析

徳島大学大学院 澤田 俊明*

徳島大学大学院 赤澤 哲也*

徳島大学工学部 山中 英生**

流通科学大学 三谷 哲雄***

淡路島環境会議 湊 格 ****

本調査は、震災後1年半を経た淡路島の被災地において、復旧・復興の状況の一側面と、都市神戸に対して地方淡路の持つしなやかさの特徴の一側面を把握する目的で実施したものである。ここでは、都市のしなやかさを判断する一つの視点として、日常生活への復帰の度合に着目し、この観点から淡路島の被災地を分析した。調査対象地区は、淡路島地区から富島・室津・江井・郡家・志筑の5地区、そして、淡路島地区と対比する地区として神戸市東灘区を抽出した。調査は、対象地区のヒアリング調査、アンケート調査、人口変動調査などを実施し、これらを時系列的に比較分析した。本調査の結果、人口の推移などの人の動きから見れば、淡路島地区は東灘区よりも、時間的・量的・質的のいずれの面においても日常の生活への復帰が有利であることなどがわかった。

1. はじめに

阪神淡路大震災において、“都市神戸に比べて地方淡路はしなやかであった”とよく指摘されているが、ここでは都市のしなやかさを判断する一つの視点として、日常生活への復帰の度合に着目し、主として淡路島の被災地を分析する。具体的には、人口変動に関する調査やアンケート調査結果などの調査データを、震災前と震災後の時系列で比較し分析する。対象地は、淡路島の被災地である北淡町：富島地区・室津地区、一宮町：江井地区・郡家地区、津名町：志筑の5地区の他、阪神地区と比較するために、神戸市東灘区を取りあげた。

2. 生活関連の被害の概要

表-1は、人的被害を対象地における人口と住居被害棟数の比率で示したものである。人的被害の地区別の特徴として、北淡町では対人口比の負傷者率および避難者率、対住居被害棟数比の負傷者率が高くなっている。また、東灘区では対人口比の死亡者

率および避難者率、対住居被害棟数比の死亡者率が高くなっている。

図-1は地区別の建物被災率（建物数に対する全壊・半壊の比率）を示したもので、各地区別の建物東灘区（本山中町・森南町）が67%、一宮町60%、北淡町51%、津名町25%となっている。一宮町では、建物被災率が高いにも関わらず、人的被害が少ないことがわかる。図-1の淡路島の地区は、被災が少ない地区も含んだ町単位での集計となっているが、被害の大きかった富島・室津・江井・郡家・志筑単位で集計すれば、被災率は更に大きくなる。

図-2、図-3は1996年10月に実施した震災ア

表-1 人的被害の比較¹⁾ 単位(%)

	対人口比			対住居被害棟数比	
	死亡者率	負傷者率	避難者率	死亡者率	負傷者率
北淡町	0.32	6.99	31.15	2.01	43.95
一宮町	0.10	1.56	8.20	0.54	8.78
津名町	0.03	0.18	1.95	0.36	2.24
淡路島計	0.03	0.69	3.06	0.67	13.91
東灘区	0.68	0.34	36.32	8.61	4.34
神戸市計	0.26	0.92	15.70	4.01	14.14

キーワード 淡路島、日常生活への復帰、しなやかさ

* 徳島大学大学院, TEL 0886-56-7350

** 徳島大学工学部, TEL 0886-56-7350

*** 流通科学大学, TEL 078-796-4401

**** 淡路島環境会議, TEL 0799-24-5126

ンケートによる職業と住所の変化の集計結果である。図-2より、職業を変わらなかった人が、富島・室津・志筑地区で約85%程度、江井・東灘地区で約90%となっている。図-3より、住所を一度も変わっていない人が、富島・志筑・東灘地区で約60%程度、室津・江井地区で約80%程度となっている。

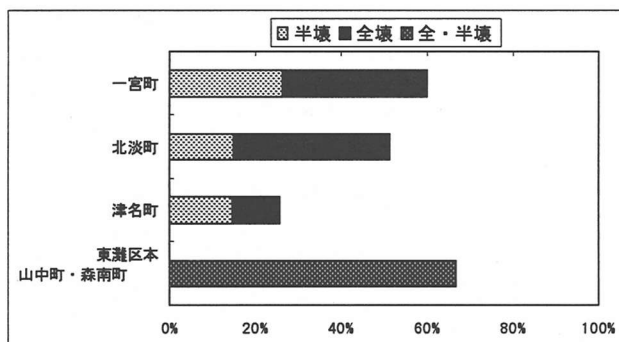


図-1 建物の被災状況²⁾

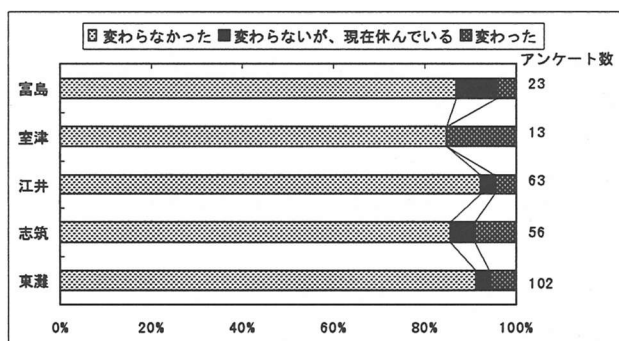


図-2 職業の変化 (1996.10 震災アンケートより)

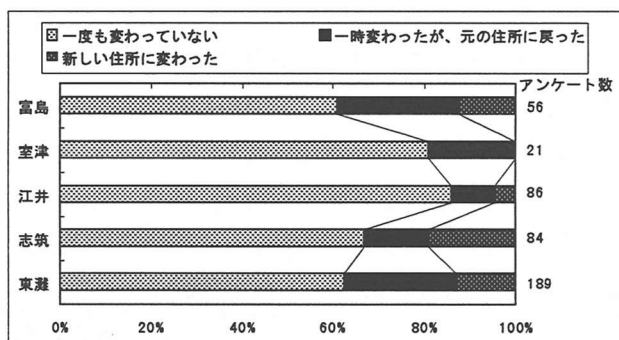


図-3 住所の変化 (1996.10 震災アンケートより)

3. 復旧・復興の推移

図-4に、地震発生後約6ヶ月間の避難者数の推移を示す。地震発生後、3ヶ月弱で淡路島では避難者がなくなったが、この時点で神戸市においては約20%強の避難住民が残っていることがわかる。

図-5は、商店の復興状況を示したもので、富島

地区や東灘区(東部地域)の復興が遅くなっている。

図-6・1は、北淡町について地震発生前の人口を100%として、人口の推移を示したものである。富島地区では地震発生後、人口減少率が地震前より大きく、そして、地震発生から1年半以上経た1996年9月末の時点でも、人口変動の推移に過去3年間の動きに比べて、かなりのふらつきがあることがわかる。

図-6・2は、図-6・1の北淡町の人口データに東灘区の人口データを、地震発生後の約半年間について重ねた合わせたものである。富島地区よりも東灘区の人口の減少の程度が大きいことがわかる。

図-7は、小学校の生徒数について、地震前と新学年の増減を示したものである。東灘区の減少率が20%強であるのに対し、北淡町では5%程度の減少にとどまっている。ただし、図-7に示すデータは、同一年度内の比較でないため、新規入学者数および卒業者数の差異による誤差を内在している。

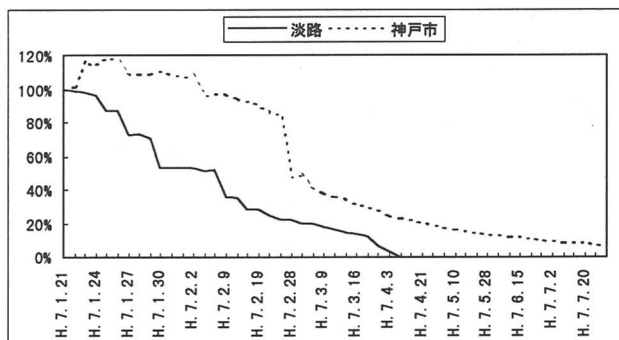


図-4 避難者数の推移³⁾ (H.7.1/21の避難者数を100%)

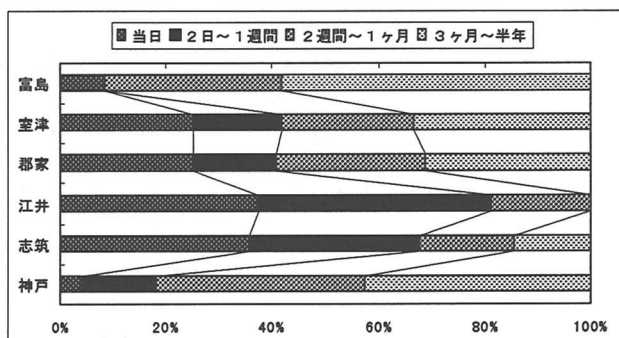
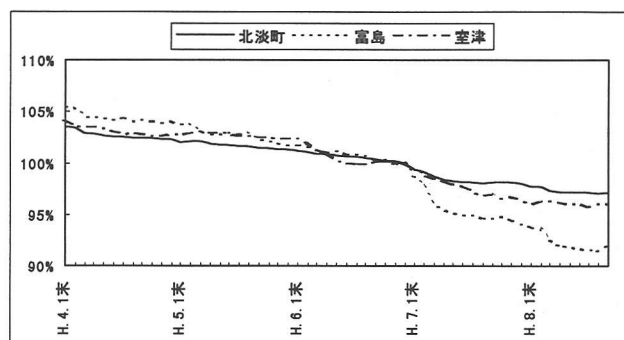
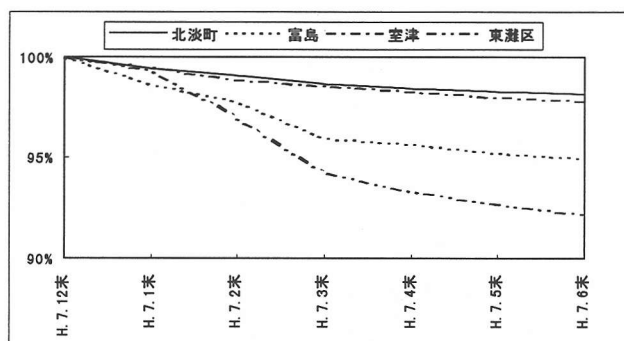


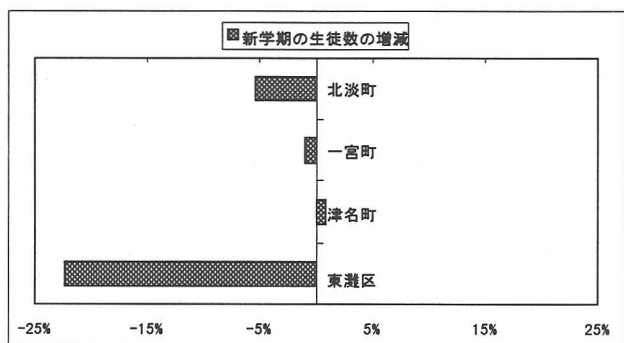
図-5 商店の復興状況⁴⁾ (1995.11 ヒアリング調査)



図－6・1 北淡町の人口の推移



図－6・2 北淡町と東灘区の人口の推移比較



図－7 地震前後の小学校の生徒数の増減率⁵⁾

4. 考察

ここでは、現在の調査結果をもとに、東灘区と淡路地区を対比して考察を進める。

(1)被害の状況について

地震による直接的な1次被害としての人的被害・建物被害は、東灘区が最も大きく、北淡町がこれに続く。これら1次被害に起因する2次被害といえるものに、職業や住所の変化がある。アンケート調査による被験者の地震後の職業の変化は、被害の程度に関わらず各地区ともほぼ同じであり、淡路島各地区と東灘地区との差異は認められない。一方、アンケート回答者の住所の変化は、各地区の直接被

害の大きい東灘区・富島地区地区が多くなっている。地震による被害や住所の変化といった、日常の生活環境が大きく変わった東灘区や富島地区の人々の、生活の糧としての職業確保への取り組みが、他地区にもまして強いことを伺わせる。

(2)日常生活への復帰について

避難者数の推移、人口の推移、小学校生徒数の推移といった、人の動きから見れば、淡路島地区は東灘区よりも、時間的・量的・質的のいずれの側面から早く日常生活へ復帰している。時間的側面としては、避難者数が淡路島では地震発生後約3ヶ月でなくなったこと(図-4)、量的側面としては、人口の減少率では北淡町の方が東灘区より低いこと(図-6.2)、質的側面としては、震災による強制的な人の動きが、東灘区では小学生といった若年層にまでかなり波及しているのに対し、淡路島では東灘区ほど若年層まで波及していないこと(図-7)、があげられる。つまり、淡路地区では、「早く・多くの人が・大人も子供も」日常生活へ復帰する人的復帰条件が、東灘地区より整っているといえる。

しかしながら、北淡町でもまだ人口変動は収束しておらず、今後の継続的な調査が必要である。

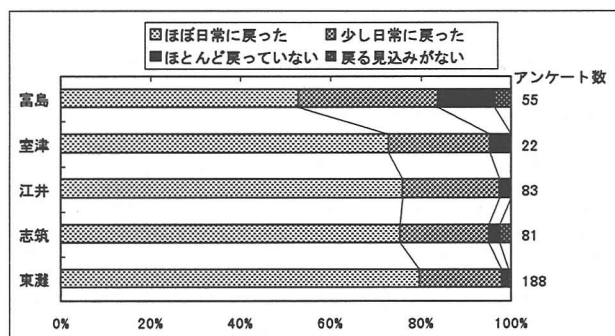
(3)住民の意識

震災後の日常生活への復帰に関する震災アンケート調査結果を図-8に示す。「ほぼ日常に戻った」と回答した人は、富島地区で53%、他の淡路各地区および東灘区は73~80%となっている。東灘区より震災の被害状況も幾分少なく、かつ、人口の動きから見た復帰状況も東灘区より有利な北淡町において、日常へ戻ったという住民の意識が最も少ない結果となった。この原因として、富島地区は復興土地区画整理により、今回調査区域の全てが土地利用規制を受けているのに対し、他の地区は土地利用規制の面積が少ないことや、富島地区における復興の場面での行政と住民との合意形成のあり方などがあげられる。

(4)淡路島のしなやかさ

ここでは、震災における都市のしなやかさを考える重要な指標として、復旧のスピードに着目した。淡路島地区は、直接的な被害に対して人の動きから見られる様に速度という面から復旧・復興に有利であったといえる。その一方で、富島地区では、他の

淡路島地区に比べて、やや復旧に対して人々の意識の面で遅れが見られ、人的な復興計画の中で都市のしなやかさが失われていった様子も感じとれる。



図一 8 日常生活への復帰 (1996.10 震災アンケートより)

5. おわりに

今回の調査で明らかになったことを以下に示す。

(1)被害の状況について

1996年10月の震災アンケート調査により、地震による住民の職業の変化は、被害の程度に関わらず、今回の調査地である富島・室津・江井・志筑・東灘の各地区でほぼ同程度で、85～90%の人が職業を変っていないことが判明した。住所の変化は、各地区の被害の程度に比例している傾向となっている。

(2)日常生活の復帰について

人の動きから日常生活への復帰を見た場合、時間的・量的・質的のいずれの側面も、淡路島地区は東灘区に比べて、日常生活への復帰の度合いが高い。

(3)住民の意識

震災アンケート調査において、富島地区が「ほぼ日常に戻った」と回答した人が最も少ない結果となった。

(4)淡路島のしなやかさについて

淡路島地区のしなやかさの一つに、復旧・復興の速度が考えられる。

【参考文献】

- 1) 徳島大学工学部；兵庫県南部地震、淡路島震災調査報告書、平成7年4月、p69、表4.3-2より作成
- 2) (東灘区データ) 堀切真美、小谷通泰、日野博幸；震災後の被災地域の復興過程に関する考察、土木計画学研究・講演集19(1)、土木学会1996年11月、P.P.93-96、本文中よりデータ抜粋し使用
- 3) 三木剛、福島徹；兵庫県南部地震における避難所及び避難者数の推移に関する一考察、土木計画学研究・講演集19(2)、土木学会1996年11月、P.P.59-62における口頭発表資料より作成
- 4) (東灘区データ) 小谷通泰、高島正樹；震災後における地域の生活関連施設の復興状況について、土木学会阪神・淡路大震災に関する学術後援会論文集、1996年1月、p.p.746-747表-3より作成
- 5) (東灘区データ) 4)と同じ、p745図-4 b)より抜粋し使用

A Study on Getting Back People's Daily Lives in the Stricken Areas in Awaji

Toshiaki Sawada, Tetsuya Akazawa, Hideo Yamanaka, Tetsuo Mitani, Tadasi Minato

The purpose of this study is to know how Awaji Island is rising from the Hanshin -Awaji Earthquake, and to clarify the pliability of Awaji Island as local towns in comparison with Kobe as a large city. The areas chosen for the study are Toshima, Murotsu, Ei, Gunge and Shizuki in Awaji Island and Higashinada in Kobe. Hearing research, questionnaire and dynamic statistics of population were carried out in these areas. As a result, from the viewpoint of dynamic statistics of population, these areas in Awaji have an advantage for the people getting back their daily lives over Higashinada in Kobe in many aspects.